

宗学とは何か

芹 沢 泰 寛（寛哉）

はじめに

私をはじめて宗学に出会ったのは昭和八年に立正大学学部に進んで故清水龍山先生の開目鈔講義に列してからである。もっとも寺に育った私は日蓮聖人の伝記や教について常識的な話に接する機会はあったが、学問と云う形で日蓮教学に接したのは清水先生の講義が最初であった。従って私がここに云う宗学とは、半世紀前の優陀那和上や綱要導師の学系に属する思考法や研究法による日蓮教学のことであって、現代において茂田井教亨師はじめ多くの進んだ諸論究に及ぶものでないことを御諒解願いたいと思う。

在学中から私の関心は科学的思考や論理的問題の方に有ったので哲学研究に進み、それからずっと宗学からは遠ざかった俣だった。

その後昭和三十年後半になって私の属する法華宗当局から宗門の教学研究所設立の依頼を受けたのを機として日蓮聖人の宗教と学問に携わるようになり、往時の宗学についての印象を想起し、改めて宗学とは何か、そして宗学とは何であったか、更に宗学は如何なる学であってほしいか、等々の問題に関心を持つようになったわけである。

この小論の構成は私の今まで懐いていた宗学概念と、それに対する私の疑問とそしてこのような宗学が日蓮系各派の教団にとって如何なる役割を果たしたのかを考え、結びとして今後日蓮聖人の教学は如何にあるべきか、更に、あつて欲しいかを考察したものである。

一、宗学の語義

宗学の語は何も日蓮宗に限らない。何宗であれ自己の属する宗派の教義の学問と云う意味の普通名詞であろう。茲に宗派とは同じ佛教の中での分派のことを指すのが一般的で、宗とは要也極也、故に宗学とは最も肝要な学問なりと言ふとすれば、それは所謂古典的宗学の論法で論理的常識からすれば直観的飛躍推理として大方を納得させることは出来ないだろう。

教義は、勿論教えの内容であるが、すべての宗教の教えが教義と云うわけではない、原始宗教や民族宗教の中で儀礼や感情的尊崇の念は在っても、信仰内容が真理として認められ組織的に表現されていないものは教義をもつとは云えない。教義は歴史的に成立している宗教の信仰内容が真理として学問的組織的に叙述されたものであるから、教義学として学問的要求に応じ総括的に体系化することも可能な筈である。

宗学は以前は宗乗と云はれていた。乗とは乗り物で教えのことである、このことから宗学と云えば、自宗の教えを学ぶことを指すようにも解せられる。佛教用語で学とは、科学の学ではなく、戒定慧の三学を学び修行する意であることからこのような解釈も出来るだろう。而してこのような学び方そして研鑽が伝統的な態度であつて、明治以後大学が設けられ科学的研究が一般化するにつれ、宗乗研究も宗学と呼ばれるようになったと考えられる。

宗学の研究法は主に教相判釈の方法を依用していた。教判は中国に流入し漢訳された佛典が余りに大量で雑多であつた為、佛の教えの意図を明らかにする必要があつた。数多の經典を原典批判するよりも、すべて積尊一代に説

かれたものとして、それらが説かれた形式方法、順序、それぞれの經典の意味、教えの内容などによって諸經典を分類、体系的に位置づけ、価値を定めるなどして佛の意図を明らかにしようとして教判が発達したわけである。尤も教判の端緒は古代インドでも大乘と小乗などの分け方に見られるが盛んになったのは中国においてであり殊に五、六世紀の南北朝時代に盛行した。これを天台大師智顛が南三北七に整理したのは周知の如くである。

しかし教判は自然の勢いとして、客観的に妥当な結論を求めようとする研究よりも、自己の教学の依り処となつた經典や論積書の優位を主張し論証しようとする傾向が強くなり、それが次第に宗派成立を助長し、やがてはその要件ともなつたのである。

二、宗学に対する素朴な疑問

学生時代から引きつづいて哲学殊に論理学や科学方法論ばかり追っていた私はいつの間にか、学問とは真理を方法的合理的に追求する知的努力であり、真理とは何人も認むべき知識、即ち普遍妥当性と客観性必然性を有つ知識であると、思い込むようになっていた。学的努力によって得られた学は仮定の上に立つ経験諸科学と無仮定を標榜する哲学が、学のすべてであると思つていた。しかし年と共に人間学や宗教学に接し、また教育や道徳の現実の問題を扱う機会が多くなるにつれ、人間の問題は合理的学問によってすべて覆うことは出来ない、むしろ合理以外の非合理的な感性的直観によって感得しなければならぬ多くの諸問題があることに気付いた。だがその方面について探究するにはどうしたらよいかの方法は未だ模索するしかなかつた。

人間における非合理の問題は無数にある、知的思维以外の心的作用は殆んどと云つてよいほど非合理的要素を含んでいると思はれるからである。例へば感情、情緒、気分、直観等、更に不安、安心、欲望、愛などは心理学の對象として客観的に科学的方法で研究することは可能であり、そのような学として心理学は今日まで大きな成果を挙

げていることは事実である。がしかし感情、欲望などが、客観でなく、自己の問題として自己の内において自分を動かしていると気づいたときは、既に合理を越えて非合理であることを体認せざるを得ないであろう。これら非合理の問題において最要の問題は「信」の問題であると云つてよい。

西洋の中世哲学に於ても信の問題は最大の難問であつた。合理的なるが故に我信す、と非合理なるが故に我信す、の両極の説が対立論争したこと、この対立から教多の問題が学問以外にも派生したことは贅言を要しない。

信の問題は言う迄もなく宗教の問題である。有限な存在である人間が遅速や強弱の差はあつても何人も何時かは必ず直面し、自覚せざるを得ない限界（死）に突き當つた際、生ずる不安や苦悩の戦きからどうしたら遁れられるか又は之をいかにしたら克服出来るかを求めるときに宗教は有るだろう。

有限で無常から生ずる不安を除くためには絶対的なるもの、恒常なるものを依拠とすべく求めることが、宗教は人間にとって本来の所産である所以であろう。絶対的なるものをわれわれの外に求めるか、或いはわれわれの内に求めるかによって宗教は自力や他力など異つた型態に分れるが何れにしても絶対的なるものは、「信ずる」以外に得ることは出来ないだろう。何となれば絶対的なものは、有限者たる人間の経験科学的方法や思弁では積極的に証明することは出来ないからである。従つて「信」は宗教の本質といつてよいと思う。

シュライエルマッヘルは宗教の信を絶対帰依の感情と定義した。理性主義者のカントは宗教を、理性の限界内における宗教を論じたが、永遠や絶対についてはただ実践理性の要請だとするにとどまっている。カントの要請とは道徳が成立するためにはその根拠として「自由」を立てねばならないとし、自由は道徳の要請である、と云う仕方
で定立することであつて、理性の積極的証明に比べて何か妥協的であり、カントは信仰に場所を与へるために理性を制限したと評される所以である。

シュライエルマッヘルのように絶対に信じさえすれば宗教だと云うことになれば、何を信ずるか、それによって生ずる人の思想や行為はどうあるかなどは問題ではない。極論になるが、信じ方が純粹であればどんな物を拝んでもよい、またその人の行いは是認されると云うことになるだろう。

カントの如く、宗教を理性に限るならば理性以外の領域は要請する外はなく、また人間の精神は理性とそれ以外の情意等の領域と分裂してしまふであろう。カントは理性を理論理性の外に実践理性をたてたが、理性主義を論理主義にまで徹底させると、理性が絶対であり宗教とは合理的法則を理性によって信奉することだと言ふことになり既にこのような宗教（理神教）が真面目に論じられた時代もあつたほどである。しかし理性の絶対性を理性自身か証明せねばならないような理論は、明らかに誤謬推理だろう。

そこで宗学は一体如何なる学だろうかを問うてみた。

1、哲学であるならば、哲学とは何ぞや、が哲学を学ぶ最初の問いであると同時に最終の問いであると云はれるが、同様の問いが宗学にあつても可能であるか。

2、カントが学としての形而上学は可能であるかとの問いを發した如く、学としての宗学は可能であるか、の問いを宗学に対して發することが妥当か。

カントの云う学は論証又は実証によつて確實に基礎付けられた根拠から合理的方法で展開された普遍妥当的体系的知識のことだが宗学の体系はこの検証に果して堪えられるだろうか、勿論宗学と科学では全く扱ふ領域も次元も異なるから比較にはならぬとして問題を回避することも出来ようが、その場合でも宗学が学である限り真理性の問題、宗学における真とは如何、の問いは避けて通ることは出来ないであろう。

3、宗学は決して科学と同列の学ではないとすれば宗教でなければならぬが、宗学における信はいかにあるか。

宗学とは何か

通例の学問的観方からすれば、信は主観的心理過程か或いは客観的真理の承認か、そして両者の關係に於て在るとなるが、宗学は前述のような客観的学では勿論なく、また、非合理的超越者を真として無条件的帰依を主張する宗教でもないが、同時に信を基本とする限り両者の要因を含まねばならないであろう。

伝統的宗学に於て、例えば清水龍山先生がこの点に觸れて、能觀の妙觀（主觀）と所觀の妙境（対象）、が境智冥合することによって信心決定する、と説明しているが果してこれはどう云うことだろうか。

4、宗学は依拠の經典たる法華經の優越性を論証することを主目的の一つとした学であつたのは素人目にも明らかであつたが、その論証の仕方は天台の五時八教や五重相待の方法が伝統的に用いられてきたように見える。

しかしこれらの方法は嚴密な方法論として検討されていただろうか。日蓮聖人は三証具足を力説されたが、後代にそれらのうち道理即ち学問としての論証が充分に為されていたであろうか。

5、従来の宗学は人間にとってどうあるべきかの觀点が不充分だつたように見える。佛教の原点は如何にして人間の苦を滅し樂に転ずるか、即ち人間を苦惱から救済することにあつた筈であり、その為には苦の原因としての人間、更にはダルマの探究へと学的努力の展開が為されたのだと思う。これが時代が降ると共に、殊に日本の徳川時代に入ると何時の間にか、人間そのものとその本来の在り方、即ち人の生死を救済するには如何にあるべきかの問題よりも經典の字句の解釈の異同や他宗他派との優劣の比較に宗学の方が進んでいったように見えるのは何故であろうか。そのように見えるのは私の僻目ばかりではないと思う。

三、宗学の利と害

宗学の利害を考量する場合、先ず、何に対して利又は害であるかの基準を定めなければならない。

およそ歴史現象、社会現象のみならず、自然現象や自然的事物は、人間にとって利と害の両面をもっている。

その利と害とは人間にとって、であるが、実際の場合にあっては利害の基準は多様である。例へば人間の生存にとって利であるか害であるか？から自分の属する集団や党派にとっての利害、更に自分の商売にとって得であるか損であるかに至るまで利か害かを判ずる基準は広汎多岐であるが共通して云えることは、自己及び自己たち（一人称複数）の立場からの利害判断だと云うことである。利又は害が主観的価値判断であるから、厳密な意味においての客観的価値基準は有り得ない。即ち一切のものにとつての利、又は一切のものにとつての害かは共に有り得ないだろう。

ニーチェが「生に対する歴史の利害」を論じて、歴史は生に確實な基礎と方向を与える限りは利であるが逆に歴史が生が生の充溢と生成を阻害し妨げるならば、歴史は生に対して害であると考へたのを採用すれば、

一切衆生の苦を救うため、人間と世界の本質を明らかにし、正しい生き方と世界の在り方を悟り教えようとした佛教の原点に対して、果して宗学は利であったか又は害であったか、と問うことが出来るだろう。

古典宗学が出来上つたのは徳川時代、それも不受不施禁制以後であつたと思はれるが、その成立に大きく影響したのは宗教的要素よりも徳川封建体制ではなかつたかと考えられる。現今は封建制の負の面ばかりが論じられているようだが、日本史の流れの中で、混沌とした戦国時代を終熄させ身分格式職業等によって社会を整理し、安定させ平和を実現した意義は認めなければならない。しかし混乱を整理した身分格式の基準が、余りにも社会各層の隅々にまで徹底し、人間の価値を定める尺度にまで絶対視され、而もその尺度は人間のためにはなく幕藩体制を維持すると云う最高目的のために、と転化して用いられるようになると、人間にとって利であつたものが同時に害となるのは当然であつた。事実幕藩体制を支える身分格式の制度を逸脱したり批判したりする思想や行為は瑣末な事案と雖も容赦なく禁圧された。祖法や前例を逸脱するものはすべて処分の対象となつた。一般社会のみならず

宗教界とても例外ではなかった。日蓮宗不受不施派を禁制したのは將軍を絶対者として尊崇しない不敬思想と見做したからであり、天和事件^①で本興寺側を処分したのは祖法に違背したとするのがその理由であった。従って各宗団はその存続を図るためには、積極的に、或いは消極的に教義信條を多少覆うても体制に妥協或いは迎合するしかなかった。受不施思想は体制への妥協であり、現在痕跡を残している差別戒名などは佛教の平等思想の本質を覆うても権力に迎合したものであろう。

日蓮聖人門流の教団の本領は、内には止暇断眠の研鑽であり、外には不惜身命折伏逆化の弘通にあった。活力のない教団ならばかかる状況の下では単なる職業集団になるか、布教によって伸長するとすればせいぜい現世利益を賣出すか、西方浄土の幻想へ誘うしか無かつたらうと推察される。皆婦妙法を標榜する日蓮教団が、外部への伸長と自由なる教義研鑽を塞がれた徳川体制の下では、内部へ向い各派抗争と教義研究では綱格が定まると共に煩瑣化して行ったのは止むを得ない流れであった。

宗学の思考法と綱格が徳川幕藩体制の中で整えられたとすれば、宗学の性格は、佛教の理想と宗祖の行願に対して次の如き利害を認めることが出来るだろう。

利と考えられる点は

- 1、雑多に亘る諸教説、諸経を整理して秩序づけた。
- 2、諸経典を分類するに際し、分類基礎を価値に関係させ、最高の価値をもつ経典を依拠として自宗派の特質を明らかにした。例へば阿含経は小乗で有を説くから劣、般若経は大乗で空を説くから勝、日蓮宗学ならば、法華経以前はすべて二乗成仏を認めないから権経、法華経は二乗成仏を認めるから実教等々。
- 3、そして窮極には佛の教説の真意を明らかにしようとした。

これらの宗学の利点は、徳川体制の身分格式制が戦国時代の混乱を整理する利であったと同時に形式化し保守化するに従い人間性と社会の進展を圧迫する害となったと同様に、害に転化する可能性のあったことは否定出来ない。即ち

1、宗学は綱格が整うに従って形式化し、煩瑣化した。果ては部分的な字句や命題の解釈を廻って分派にまで發展することがあった。

2、他宗派との差異を明らかにすることは自己の優位を主張し、新たな宗派的差別意識を生んだ。

3、自宗の宗学の説を基準として他の説や佛教を見る観方が一般的になった。それはアリストテレスの「本性上先なるもの」の観方より「我々にとって先なるもの」の観方が優位を占めるようになったと云えるだろう。しかし、他方所謂第三者の、各宗各派はいろいろな云うが、富士山の登山口は異っても頂上は一つであるように結局佛の教は一つだろうとの常識を破ることは困難であった。

4、宗学の形式化は次第に専門化するに従い、宗教本来の問題である人間の実存と不安の救済を追求することが忘れられて行った。

要するに宗学の成立は自宗派の教旨を明確にして学問的根柢を定めるとの積極的意義はあったが、専門化し煩瑣化するに従い、佛教の本旨である一切衆生を真理の教えによって苦から楽に転ぜしめるとの道を究めるための学でなく、自己の宗派を他宗と比較して優越を主張する余り、却って自宗内に新たな対立を引起した。また民衆と遊離した宗学は正法を弘めて民衆を向上せしむる力とはならず、民衆は現世利益や呪術の宗教に走るしかなかったのである。

四、望ましい宗学（日蓮宗学の未来像）

宗学とは何か

この問題に関しては考究せねばならない事柄は余りにも多いので本稿では主要な諸点について要項のみを提言するにとどめたい。

1、宗学は宗教として信、学問としては真でなければならぬが、哲学史や思想史の中で信と知の関係、即ち宗教と科学の関係として困難な問題として扱はれているが、学としての宗学を如何にして可能ならしむるか。を根源より再吟味する要があると思う。学的真でない単なる信は、盲信の懼れあり、信のない学は真に人間を幸せにするものではない。学によって裏付けられた根源的信が(向上的)、具体的人間の行(向下的)として展開すると
の図式の各段階について充分な研究と基礎付けが為されることが望ましい。

2、人間救済の宗教としてまず人間の本质と現実がより一層厳密に究めらるべきこと、即ち実存、生、死、不安等の極限状況等の究明。及び現実の当面せる緊要な難問に対し提言の根拠を与へる。

3、佛教諸寺院が死者儀礼に伴う諸行事や現世利益配給の諸行事に重点をおく在り方から現実社会と人間の諸問題解決に積極的に参加し、助言と指導が出来る為の理論根拠と方法を提示するものなること。

4、故に宗学は狭義の宗義学であるに止まらず歴史、実践の学を含む体系的学に発展すべきこと。

以上のような要求を充たすような宗学は従来の宗学概念から遥かに逸脱するかも知れぬ、しかし日蓮聖人の宗教、否法華經の宗教が、末法即ち現在及将来に世界宗教として人類の為の宗教である為に宗学が擔はねばならない課題だと思ふ。

註 1 天和事件。天和年中本能寺と本興寺間に紛争があり、本興寺の言い分は祖法違反なりと幕府より判決され

た事件(『松葉記』本能寺蔵)